

川柳の証 月刊

麻生路郎主幸

九月號



200

Pensoj flugas trans la land-limon

第十七卷 第九號

川柳雜誌 九月號 目次

表紙	(燈火)	福井哲
川柳寫眞	大西八歩	(一)
二百號祝詞(寫眞)	楊柳夢	(七)
千人針(畫)	柴谷幸二郎	(二六)
★		
内外時事	(一)	
新體制下に(雜感)	麻生路郎選	(一一)
布哇の女性	前山北海	(一〇)
省二氏に聴く	省二・舛樂・かはる・豆秋・某人・白柳子・霞乃・路耶亞鈍筆記	(三)
浴衣がけ	安川久留美	(二八)
人間性と純粹性	高鷺亞鈍	(一〇)
川柳御時勢	小畑自由朗	(二〇)
武玉川四篇研究(一〇)	森本塵山 蛭子省二	(八)
布哇ミルキヤンプだより	長谷川猿吉	(一九)
某月某日の出来事	諸家	
其の一(一二).....其の二(一七).....其の三(二二).....其の四(二三).....其の五(二八)	前田五健 阿田某人 戸田孤篷 橋本言也	(一二) (二二) (二七) (二〇)
狸(續)	諸家	
節米・代用食	諸家	
貝卸	阿田某人	(二二)
感吟に就て	諸家	
川柳小型シナリカ	日本史繪卷	
朝鮮料理	戸田孤篷	(二七)
一問一答	橋本言也	(二〇)
★		
近作柳樹	麻生路郎選	(一三)
川柳塔	麻生路郎選	(一四)
同舟近詠	諸家	
不朽洞句抄	麻生路郎	(一)
極樂	須崎豆秋選	(二五)
集路一豚	岩崎柳路選	(二六)
各地柳壇	(一〇)	
柳界展望	(二六)	
川柳協記	(二五)	
社關係の人々	(二四)	
★		
★		

祝奉年〇〇六二紀皇

川柳雜誌創刊二〇〇號紀念

川柳とは？

初代川柳柄井八右衛門に就て・川柳の形式・古句研究の仕方・作句のコツ・選の仕方・句會の方法・吟行に就て・川柳寫眞に就て・川柳時事吟・戦線銃後の句・川柳詩論・作家・作句・態度・題詠に就て・雑吟に就て・川柳と漫畫の關係其他

★時 日 九月十五日(日)午後一時開會

★會場
大阪市東區高麗橋 三越 八階ホール

★兼題
「部隊長」
橋本綠雨選

「節米」水谷鮎美選

各題五句 締切九月十日限のこと

大家・中堅諸氏―演題は「川柳とは？」

大家・中堅諸氏への會の縦断面

各適天立之粗品増呈・出席者に記念品

各題三件。粗品與三品。品月。三品。品月。

受當日當者は（受當日當者は）

大阪市西區江戸堀上通二ノ四六昭和ビル

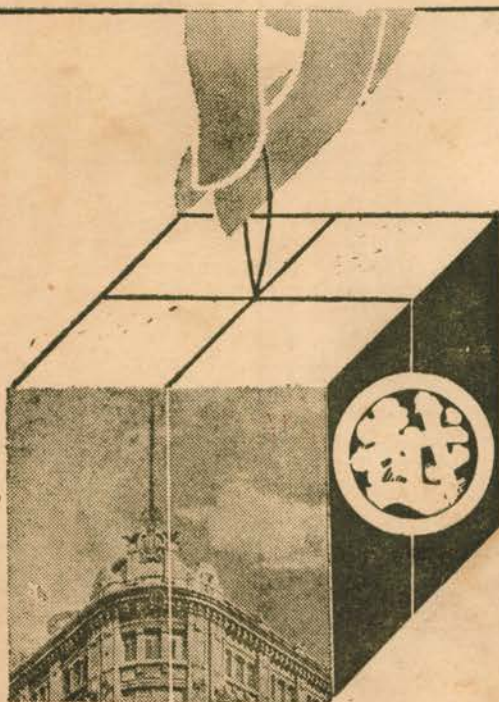
主 催
川柳雜誌社

出席希望者は招待券を社宛に請求されたし

電話土佐堀 八 三
一 三
六 三
三 三
番 三

ルービヒサア

大日本麥酒株式會社



お買物は三越へ

大阪・高麗橋

新體制下

に (雜感)

神よ、汝はすべて、骨折りと引かへに
我等に善きものを與へ給ふ——

レオナルド・ダ・ヴィンチ

一號一號世に送り出して遂に二〇〇號に達した。小學校の數學よりもやさしい斯んなことを考へるは、今私の嬉しきものである。試みに「川柳雜誌」の合本を積上げて尺で計つて見たら二尺三寸四分ある。その傍に立つて、私のからだに比べて見ると、斯んなことよりも嬉しい気分を感じる。私はホントに幸福だと思ふ。この欣びを私に與へて呉れた諸君に私は心から感謝してゐる。私は「川柳雜誌」の二〇〇號を通して、人々が何んか思つたところで、一切を意に解しないで自己の信するがまゝをひたむきに歩いて來たやうな気がする。しかし自分分の云ひたい事を、川柳を伸

ばしたい一心で、云はずに抑へて來たやうな氣もする。自分としては云ひたいことを人のために云つたやうな氣もする。一つの仕事を完成させるためには、さうしなければならぬ事を、教へられ來たやうな氣もする。それが世間だ。死線も越して來た。金儲けを振り向きもせず、阿呆拔ひにされてゐる。そして

八歩

不朽の句抄

郎 路 生 麻

七・七禁令奥様の變りやう
ノータイへビール一本有難し
町内會になくてならない人で死に
お祖父さん 忘れた 洋傘を云ひ出され
蟻ご詩ご或る日の僕を小さくす

て十七年間か、つて僅に二〇〇號を積み重ねたのである。よろこばずにはゐられない。
私は二階の一室に、一家族を召集した。こんなことは未だ曾てないことだけに、子ぎもたちは皆心配そうな顔で、目白押しに並んだ。私の横の椅子には、腹乃が腰を下ろしてゐる。
「さて、みんな集つてもらつたのは外でもないが、さうして、親族會議のやうなことを私は言つた。」

何んの躊躇もしないで直ちに實行に移す。云ふことだ。命令が出る。たゞは七・七禁令だ。私はこれまでも、お前たちに贅澤をさせてゐる。が、自分で贅澤だと思へた。これは一切しないことにする。云ふ風にすれば、近衛さんの新政治體制も案外巧く運んで、私たちが、お國のこころになる。配しなくとも、こころになる。さうして、法律の穴ばかり探がして裏を行くやうな行動をすれば、幾ら近衛さんでも、

★新體制下には、新體制の川柳がうまれねばならない。
ある支那人に云はせ、蔣介石が石亡び、支那亡びなう。云ふ。いかにも法字の支那は亡びないが、ホントの支那は五十年の昔に亡びてゐる。云へる國が亡びる。いふ経験ぐらゐる大きな経験はないだらう。

ペン・リソム

スラスラ書けて錆びず値の安い此のペン

優品 国産

美便裁機 牢堅造機

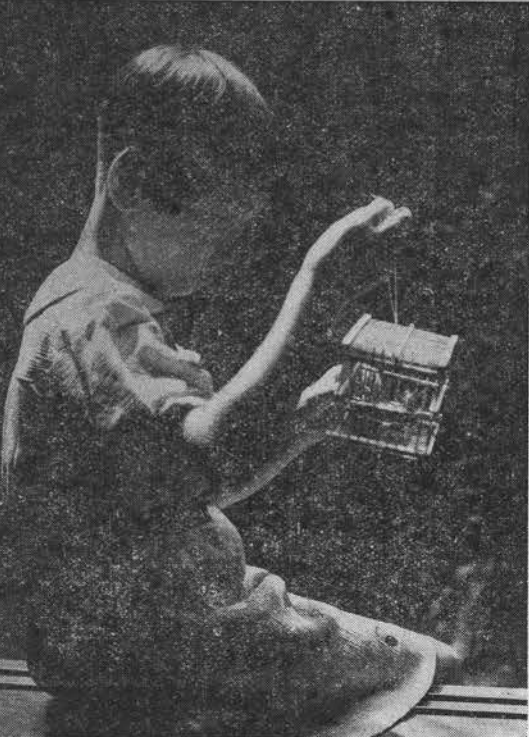
ムウニデリイ質硬 先ンベ金白

澤井商店

筆年万ンウテク

煙草の廣告に「無駄なく喫ひませう」云ふ文句があつた。私はこころの頃の手習ひの眞ッ黒けに光つた草紙を思ひ出してゐた。
★川柳人のG君が次のやうな話を聴かしてくれた。
「私はアメリカの生命保険に二十五萬圓契約してゐる。が、AクンもBクンもCクンもみんな解約した。それで、残つてゐるのは私ひとりだ。それで私も年々三萬圓宛掛けてゐたのを解約することに、會社へ何日行くからさういふ通知を出して置いて、當日出かけた。十分間は待たして、窓口から、ヘーイ云つて二十萬圓の小切手を無造作に渡して呉れました。エライもんだ。日本の會社だ。す。斯うはいきまへんで、課長が出て來たり、外の人が出て來たりして、何んさかも

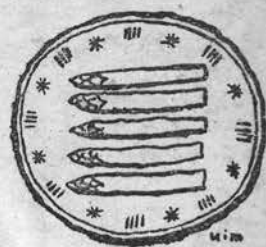
★内外時事★
★御歴代天皇の御追號讀法勅定。
★國定教科書訂正。八月。
★英、在支駐屯軍を撤退。(九月)
★大阪に相乗りタクシー出現。
★獨、ロンドン市中を初空襲。(十月)
★舊ボーランド永久に大ドイツ領に編入。(十月)
★日瀋兩國初めて公使を交換。(十月)
★トルッキ横死。(十一月)
★大阪醫科大學レントゲン自動車完成。(十二月)
★新體制準備委員を内定し、新體制具體化に一步進出す。委員二十六名と閣僚全員(二十四日)
★木炭一人二俵、十月一日から切符制實施。大阪準備の都合では十月十六日。
★連達小包廢止(九月一日)



哲 井 福 ラ メ カ

「これから毎週一度位、斯うしてここに集つて、みんなで談話したいと思ふ。今後お互ひに何か云ひたいことがあれば、此の席で云ふことにしたい。今日は父さんが近衛さんの新體制の話をしやう。尤もお父さんもまだ詳しいことは知らない。知らないので詳しういふことが知らないので、今後は少しづつ、何かが知らされ、何かをしなければならぬやうになるだらう。その中で私たちに三つて尤も大切なことは指示されたことを素直にうけ入れ、

さうにもならないにきまつてゐる。私のうちが、現在斯うして幸福に暮らしてゐられるのは、いろいろな小刀細工をしないからである。別に贅澤をしないで、今喰べる米がなくて困つたことがないやうに、みんながその氣になりさへすれば、現在よりもつゞいてお互ひが幸福にいける筈だ。それが出来るか、出来ないかは、お互ひの心の中にある問題だ。お云ふやうなことを談話で散會した。子ぎもたちから物價に對する質問などが出て興味を深くさせられた。



某月某日 の出来事

編輯局からの書信を受取られた日の出来事を執筆していただきました。願不同(編輯局)

杭

福知山 小畑自由朗

突如——子供が三十九度一分の熱を出した。家内を氷屋へ走らして、親父は醫者へ駆け出した。「わしや何んにも喰わしやせんぞ」と、辯解しながら婆さんもあわてて、拜み屋さんへそくそく出て行って行った。

悠々としてやつて来た醫者は、「多分風の様に思えるが、時候柄勝かも知らんし、又は或ひはひよつとしたら扁桃腺かも知れんが、まあ心配することはなからう」と、わけのわからんまゝに、それでも注射をして、薬を取りに來いと云つて歸つて行った。

それと入れ違ひに、お婆さんがはあと／＼息せき切つて拜み屋さんから歸つて來た。さうして、「今朝方家の裏手へ杭を打つたぢやろうが」とえらい見暮である。成程伴は今朝方牛をつなぐ杭をたしかに打つた。「それがお前、勿體ない、金神さんの頭の眞上ぢやつたもんぢやで其のたゝりが可哀想に此奴に當つたんぢやさうな」と、婆さんは孫を憐れでしやくつて眞面目である。

「それぢやで日頃からわしが云

はんこつちやない、杭を打つ時にはよう方位を見てもろうた上で打つもんや、とあれ程云ふて聞かして居るのに」と、四十になん／＼とする伴を叱りつけた。

「而し、金神さんも金神さんやないか、頭へ杭打たれて居るのやつたら退いてくれたらえゝのや」と伴は髭ツ面を吹らませた

「何んぼ神さんかて、不意に打たれなはつたらそんなにまががあるかい」と婆さんがむきに成つた。

「せやかて、何も子供に罰當てなはらんかて、打つた本人に當てなはつたらえゝのや」と、嫁が面を吹らませた。

「水臭い」と伴は、サツツと一瞬間だけ思つたが「ほんまや」と心から同意した。

「お前達はそんな心懸けやさかいに」と婆さんは怒つて、「わしや杭を抜いて來る」と家の裏手へ出かけて行つた。

(二二六〇、八、一四)

第二世

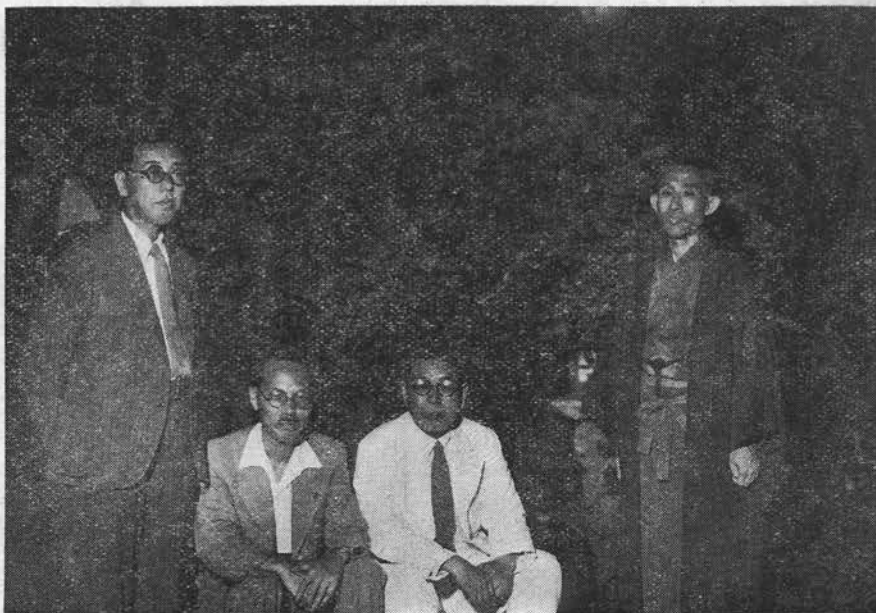
兵車 酒井美知夫

「赤い自動車書いて」「ウン」

「今度は白い自動車書いて」「赤鉛筆で白い自動車だから一寸むつかしい。」「飛行機書いて」「飛行機はキと云ふ字の上の出んの

雲水にて

蛭子省氏・澤田四郎作博士・麻生路郎主幹・森東恵氏(向て右より)



省二氏に聴く

於不朽洞

蛭子省二 西田 艸樂
高橋かほる 須崎 豆秋
清水白柳子 岡田 某人
麻生 路郎

路郎「こゝで雑談を一寸打切つて、蛭子さんから何にか承はりませうか。」
省二「蛭子にものを聴く集り」とかいふお話でしたが、どうか久し振りに出てきたのであ

柳が選をしたものでせうが、それ以外にかなり句がある筈、残つてゐますか。

省二「万句合ですか。近年同志により旺んに研究されつゝあります。川柳點万句合に就て、川柳壇萬歳の珍聞がありま

すが、一寸今口外が出来ないのです。川柳點の外、收月點其他残つてゐて、柳樽以外の佳句にあります。現代選の新俳風柳樽を編輯する事は、大に考へてよいのです。万句合の活字化が第一ですね。此頃川柳誌を拜見してゐますと、現代人作で古句に類似して居るものを、常に見出しますよ。これは致し方のない事ではあります。然しそこに終生古句を見て居る必要には迫らさせられます。昔は他人作を盗用したのではないかと思はせられるものもあつて、江戸坐本や御連載願つてゐます武玉川にしましても、一字位の違ひで重復して居るのが眼につきます。

艸樂「柳樽の式でなくて、万句合から採つた句を編輯したものはありませんか。」

省二「殆どありませんね。艸樂」では、當時の句は柳樽によるほかないわけですか。

省二「まあ夫れが一番便宜であり、資料としては尊い次第です。勿論、他に句冊は御座います。」

路郎「大體附句といふのは、うまく、くつ付けると云ふ遊戯のやうなものだから、誰の作品でも構はない。くつ付ければよかつたのだ。だから俳諧と川柳とに同一の句があるんだ。」

艸樂「つまり詩を作るといふ態度ぢやあなかつたからね。路郎」さう、態度問題だね。こゝで洒落が出て、その洒落が誰も知らない事で、人の言つた受賣りだとしても、それが可笑しくて、笑ふといつたやうなものだね。

省二「大阪や東京(其他の地方のお方にも)の川柳人に、特に御助勢が願ひしたい一事は古句に現はれて居る名所古蹟その他に於て、昔と今とを對照して書けば、古句に興味の乏しいお方にも、多少興味を喚起しはしないかと思ひます。先般東京へ首尾の松及その附近に關し尋ね合せました處が、知らないとの御返事丈けを頂いた。さういふお方には、甚だ勝手なわけではあります。電車代と時間を費せして實踏して頂きたい。東京人の責務程に感じてですね。大阪方面でも、淀川舟行の句は武玉川にもよく出てくる。全體どこ／＼に留つたのであらうかなどは研究に値致します。

艸樂「今の宗禪寺から十三あたり、渡邊といふところなど」

省二「神戸の栗郎さんに、淀川兩岸一覽をお調べ下さる様にお願ひ致しました處、調ぶれば不審が多い。そこで大阪圖書館のお友達の方に問合下さつた。すると益々不審が濃くなる。研究の興味ですね。遂に天満宮圖書館の藤里さんに話は廻つていつた。私からも持病の療法で出狀のおりに、お尋ねも致したのですが、幸にも曾て古本屋から一束お求めになつた書物の中に、参考となる小冊子を、偶

塔 柳 川



路 郎 選

母堂を養ひ給へる鏡々氏へ

麻生 霞 乃

あの雲のかげに聲する一七日
すす虫はこれか淋しや晝の籠
風さつこすすきの虫をだまらせた

大 阪 橋 本 緑 雨

頂上で帝都が見えぬうらみなり
雲海は眺めるだけでものたらず
奥宮の人混み無事な顔ばかり

奉 公 日

單衣物金糸銀糸の色はなく
電髪に砂をあげせる海水着
電髪は家から外へ出ぬま決め

横 濱 福 田 山 雨 樓

母誌二百號に寄す(二句)

二百號新体制を迎ふる日
師よ友よ座り直さう二百號

八甲田山を望む

原始林夜は熊でも出さうなり

奥入瀬溪流美

密林に阿修羅の流れ身に迫る

十和田湖景観(四句)

遊覧船進み行くまゝ時のない林

瞰湖台天上天下僕一人

鐵梯子下駄で探ぐるは旅のもの

展望をバスで名残りを惜しむ朝

大 阪 奥 村 丹 路

貧乏の部にも入らず日々勤め

雷雨沛然ビルの窓々貌が出る
宿替に關して夫婦争ふよ
小説を買ひぬ日曜日暮れぬ
クリムソーダけに小市民夫婦こゝに
事務疲れ狂人の眼をしばし持ち
銃後也月端麗にして高し

深 夜 雷

氣がつけば死ねる覺悟は出来てゐず

大 阪 大 西 八 歩

立ち直る力を草の風に知る
蜻蛉、蜻蛉なまじ黙つてゐるもよし
文盲の氣樂さ眠る事多く
酔うて來て云はすもがなも口をつき

布 唯 高 澤 一 浪

首をふる女は首をふつてよし
怒るのを怒らせて置き街へ出る
金儲斷然耻づる所まで

教子の女給色氣のない話
酌ぎませうOKOK酌ぎませう

本物の燕ぶらぶらして居らず
又だますつもりか驚なげ見せて

掃く程の内に一人が見當らず
花便り七千キロの彼方より

好な妓であれごあまりなせびりやう
莫迦遊びするにもやすい高いのこ

考へて置くことも好きな妓は言はず
胸をやむ人こは見えぬ大獅子吼

話せない男社長に見込まれる
娑婆へ出て見れば以前の風ならず

思出のあの夜の帯をしめて見る
攻勢のマダム女ご侮れず

ものにするつもりへ金を注きたり
若旦那女中の母をもつ御方

寝ころんでみたい春田がみぎひだり
釣つてゐる一人残して俄か雨
★石山寺才女の顔で撮される

京 津 雜 吟

大 阪 戸 田 孤 篷

名物のチラシボケツで飯になり

大 阪 中 島 生 々 庵

四十過ぎやつこ職場の味を知り
自家用車爪噛む癖が止められず
罰あたりビール過ぎての下痢だこさ

兵 庫 縣 川 西 町 戸 倉 普 天

訪へば會議中ですこ計りなり
早退けの裸に持った蠅たゝき

人の群れ鳴呼外米の顔計り
奉公日無心煙草に味があり

七七令但二號は必需品
七七令吾晚酌へガンミきた

福 知 山 小 畑 自 由 朗

切符制犬の分だけやせまつさ
妓が歸へり吾つらくご非國民

ワイキキの日本へ續く海へ竹つ
ビケットの一人巡査に話しかけ

ホ ノ ル ル 前 山 北 海

米兵の土産に買った長きせる
ツイリストグラスハウフの無い不平

布哇きて金の成る木はありません
八人目愛兒なごでは無い騒ぎ

總領事が譽めて見直す海の色
謡曲を目出度いものご二世聞き

英佛の退却振り英紙譽め
船出まで任かされて呑む河豚のちり

二階借けふも美人の客があり
四十過ぎ目醒し要らぬ朝を起き

四十過ぎ長女に婚期迫り來し
四十過ぎ長男に背丈追越され

四十過ぎ茶屋で覺えた佐渡おけさ
四十過ぎあつさり捨てた政治慾

四十過ぎ凡人の道を歩む肚
日米關係惡化(二句)

事毎に初代二世へ色眼鏡
日米の不戦信じた腰を据え

★

大阪 田中 風葉

八卦屋の余得美人の手も握り
俺の子を或日みつめておかしなり
無禮講さ言ふものゝ近寄れず
信用の道具に髭も使はれる
辭退して辭退して取るボチ袋
下手な字も追慕の種なる別れ

廣島 濱田 久米雄

二等から三等を見る顔になり
歸還兵無言ほまれをやをら出し
人情に桶突く人の眉狭し
小役人氣質給料の話する
軍需工の話へ耳を貸すまいぞ
軍需工の或る日は藥瓶をさけ

七月下旬病氣靜養

養生は故郷の夏があるばかり
僕だけに食はず玉子へ臥走り
醫者同志しばしは獨逸語でしやべり

大阪 杉原 大研子

純綿だなき世間の變りかた
成金の夢破れたり殿しい手
昇給が應へそうにもない物價

大阪 菊澤 小松園

いゝ方の柄は時局に副はぬ帯
電髪のうちれ伸ばすに一苦勞
嫁遅れバーマネットへ泌みる風
座談會光る指環をソツミ抜く
○褒めれば○ばかり書く子が世嗣

大阪 魚住 満潮

持つものゝ思ひのまゝの世になりぬ
口繪では金持銀を持つてたち
盗まれる何物も無し夏嬉し
蚤取粉子のきんたまの下もまき
相談所先立ものゝ要る話
病人も頭をあけて禮を云ひ
闇取引娘は教會へ通つてゐる

ピストルが手近にあれば死んでゐた

闇取引今日は伊勢路の土を踏み
節米は言はれるまでもない生活
米の値も知らず載く博士號
晝ぬきの僕の生活へ所得税
病人も金の出處知つてゐる

自嘲

滿潮云ふ男あり豆炭の列にゐる

大阪 岩本 雀踊子

ハナ、ハトが讀めてワンタン注文し
父の箸子の箸無事な夜が來た
稻田をなで、來た風齒磨粉
舌先に踊る代用食の味
父のせき安心させる日はいつぞ

大阪 清水 友帆

教養があり戀愛に遠くゐる
自活する女の部屋の翻譯書
働きに行く娘岩波文庫讀む

大阪 石野 秀雄

闇だつかさは助からない流行語
入口がモ一つあつてボロ儲け
何度めかを若い夫が叱つてゐる

細菌の作用ですか不思議がり

大阪 清水 史路

全快出勤

咲きそろふ鉢取り入れた朝を出る
バーマネットもいゝなと思ふひに逢ひ
ほこぎぎす師のあかつきを醒ますまい
婦人會計さんはいかす後家
こんな世もあつた地球儀はなり

容貌魁偉精悍にしてちんちくりん

暑休に子供二人妻の實家に行く

山の土踏む足のうら痛からう

ねびえすなな平かなの便り書く

蠅と蚊に姉は茶碗を持つて逃げ

友達へ電車の話してゐるか

友達へ電車の話してゐるか

御惠を紙芝居に盛つて宜撫班

下關 多田市 多樓

そんな事さうでもないゝがさは他人

腕一本、腰一本は小さいやつ

世の中へ愛憎つかしたやうに死に

三拜九拜性根もすでに勤め人

父さ娘さ住む運命の灯は暗し

下關 濱田 賢次

かくし藝社長に勝てぬものばかり

夕立がやめばトンボの世界なり

山や川眞夏の蟻の仕事振

仲人は女にこりたさは見えす

赤蟹へ露天風呂からあびせかけ

初恋をさせた女もゐる故郷

青インキ指からこれぬまゝ務め

大空に慾を捨ろさ教へられ

腰辨で來て菓子だけをばこぶ役

文意のみ御さり下さいペンを置く

ちり取りの中より資源の一二點

ぐな親を持つ程不幸有るまじき

一助にさ氣附き手仕事して見度く

朝顔の赤は子供にみなごられ

ウキスキ一左遷の君を待ち呆け

問ふ聲へ答へる顔が強すぎる

女祕書ほたんの花をもてあそび

母の背のまがり給ひてあせほかな

風來坊の蛙の中の親蛙

砲心に爆撃行の雲が見へ

慰問品故郷の土がついてゐる

灯を消せば大陸寝れば日本兵

小休止大和魂素ッ裸

歸還して

統制く戦地をおもふ日が多し

大阪 市場 沒食子

葦平も銃後のだれたのをなけき
闇相場弱氣の店がさびれ出し
春雨も四十になつて興がなし
出征中に出来た子供が歩き出し

新体制

大同へ小我を捨てた頼しき
子女手當芽が出ました子澤山

名古屋 吉田 水車

路郎先生へ感謝
精進の坂ふりかへる二百段

大阪 須崎 豆秋

向日葵はすほらの方へ向いたま
バットの火にんまりこして貸してあけ
守り札もろこもチボにこられたり

大阪 後藤 青兒

打水は舉國一致の話する
車窓あけて遺骨に見せる故郷の山
舊友は西瓜を置いて丸くなり

大阪府柏原町 宮岡 白峯

外米の飯だけ入れた折靴

天神祭雑感

冷し飴だけが賣れたかなと思ひ
もう通りました交通巡査も来
大阪の街にもなれた十八九

松本 石曾根民郎

ひさづまの死に馴れくし夕燕
天井をたのしみ大人寝入るなり
贅澤の敵を追はや炎天下

スバイ撃つ顔を揃へて朝の虹

大阪 原 史 風

國策に沿ふには越後めしのよさ
凱旋に妻黙々後につき

佐渡の旅して

流されて居ても日蓮法を説き
遠島に逢うて見たいよ佐渡の月

金山参観

人の眼は哀れなりけり石一つ
氣の強い女と思ふ簡單着

大阪 正本 水客

カン／＼帽冠るよしなき頭にて
劇場の天井を一人きて見詰め
團服の端然として居眠れる
動いても止つてゐても貨車暑し
年寄の厚かましきへ笑へてき
坊さんも走つて乗つて發車する
轉校の日は級長と連れになり

豊中 黒川 紫香

母親へ少しかゝんで話する
廣つばの野球巡査も立止り
バス三つ並んで山の驛靜か
芋を堀る父の背中がまんまるし
縁側へ立てば體操してる父
月見草遙か遠くをバスが行き
御祝儀を女がくれて當てがそれ

大阪 丸尾 潮花

叱られた娘の當てもない歩み
ビール一本河鹿の聲が聞えます
海水着波にさからふ色が派手
忘れた人から貰ふ見舞狀
淋しいのか妻は昔の話する
芋喰べに來たのを運ぶエレベーター

大阪 大坂 形水

子を預けほつと頼りない夕餉
儲け口の話斷りニュース聴く

大阪 岡田 某人

田を埋めてあゝこの土地も切賣りか
風のある日のネクタイの若さよ
俄雨大觀がく山となり

火事があつたな見てさほる高架
サンダル靴がありこの家も平和なり
闇をさびゆく驛あり人の居るならむ
不精髭が仙人じみて來る歳か

湯の奔る音まだ明けぬ蚊帳に覺め(湯崎温泉)
バス町へ入れば鰯を煮る匂ひ(串本)
燈臺も見ずに直ぐ發つ氷水

三縣の繼ぎ目さいふも景のうち(瀨峽)
槽氣森たり皇族下乗札(本宮)

湯けむりの淡さへ下駄を借りて降り(湯温泉)
ふだらくや土産の飴も統制下(那智)

尼崎 酒井 斗風

いきさつが過去まで洗ふさびしさよ
しほれたる後ろ姿に風のふく
金のない涼しさ天の河が見え
金がある男遠慮なく笑ふ
時來り時去りうごんの晝つぐく
代用食だが没落をする階級

七月八日うどんげが咲く

うごんげが咲いて朝寝を起される
スタイルブツク女の腰は細いもの
一錢屋も云ふ印を捺し

習字を始める

大阪 北川 春巢

三十の手習ひも手へ墨をつけ
發送の嬉しい小言きく日なり
先生の白髪もひかる貳百號
お互の白髪を笑ふ貳百號
驀進の行手遮る雲もなし

貳百號記念號を祝して

全癒して夫の力尊かり
蟻如き二三匹なら喰つちまへ
寝不足のまんま女房老けてゆき

大掃除の日

下關 櫻川 不水

稼いだなあごのがらくたも俺のもの
野外映畫スクリーン三分月七分
國債は當らなんだと安堵する

大阪 森 宗 男

バーマネットの出資は君がしてたのか
ダンス狂が雑沓を縫うてます
念佛が子守歌めく子澤山
情熱を殺す努力は止したまえ
叔母さま叔母さま書いて無心めき

廣島 大森風來子



年百六千二紀皇祝奉

巻繪史本日

＝ オリナシ柳川型小 ＝



蓬 孤 田 戸

「句は挿入字幕として同時に讀み上げられる」

太陽——鶏鳴

お日の出へ先ず拍手の朝が明

金鶏勳章が太陽にダブル

功六級遺骨の前で蓋をあけ

金鶏勳章消えて太陽が輝き移動

して神社の千木榎木へバン

玉砂利はみんな磨いた美しさ

神社の鳥居が御陵の鳥居へ

みさききの森へ驚鳴きにくる

御陵の傍に立つ塚。そして墳

墳輪ちと喋つてほしい考古學

墳輪から佛像へダブル

信心と別にみつめる百濟佛

佛像から佛殿へ佛塔へ

九輪か鷗尾から春が霞み出し

藤が咲き櫻が咲く

松と藤十二重衣と京の春

散る櫻の花びらへ日本刀が

正も邪も光る力が知つてある

日本刀を素手でつかみに来る蒙

古の巨手

神風をまだ解しかねる忍必烈

金々々ジバングの夢忘れられ

蒙古の巨手が消えた日本刀に菊

水の聖旗がO、L、

不死鳥書葉茂れる櫻井の

菊水がアツプして寛の水、そし

て茶室

水を聴き風を聴いてるげて茶

碗

茶室の御床から能面や鼓のおい

である書院の違ひ棚

九番もの岳父はワキを引受け

違ひ棚が桃山風な大櫓、城内の

廊下、天守閣が見える

大阪城日本一の人が住む

アンジェラスの鐘と天主の大

太鼓

天守閣にダブル天主堂

幕府よりデウスのおそろし

天主堂の内部にモデルシツプが

置いてある。——南蠻船

遠眼鏡あの人船もどつて来

南蠻船が千石船にダブル

儀もの積んで千石船が着く

(儀もの＝北海の物産)

千石船の胴の間大福帳がかけて

ある。町家の大福帳へダブル

陶算用阿波座に銀座座の座

町の足足がざわめく。十手が

飛ぶ。新選組の提灯が飛ぶ。

雑草を肥すにしては貴い血

田の上に錦の御旗がダブル、アツプしてくる。手はじめはトコトンヤレの軍歌集。春の田。向ふに汽車の煙がみえる。五ヶ條が議事堂になり汽車になり。煙。煙。それが極東地圖になり、台灣朝鮮樺太を加へてゆく。本洲の真中に日の丸が立つ。没法子繻帶のまゝ印を押して生蕃の子供君が代よく覺え七段のかまへ次々沈められ日の丸の寸法チヨンガイ聴いて去に。地圖が世界大にひろがる。その上に日英米佛伊の五本の旗がひく。【川柳雑誌】 二百號祝詞

ロツク(露)そして圓ブロックが區切られる。英は獨伊にかはらんとしてゐる。そして圓ブロックの全東亞がクローズアツプしてそれ一つばいに日の丸がダブルを一つ消すひまもなき北大。民族の歴史に指を觸れさせず。蘆溝橋興亞の門のひらくとこ。朝陽は大陸へ匂ふ東風。某日某日の出来事 (其の二) 水の出水水道。大連 佐々木三福。世の中で最も大切なもので、高松高商。楊 柳 夢。年の大旱魃には、殆ど一年中水道の制限給水に悩まされ続け。た。何しろ河と言ふものの無い關東州では、水道は山と山の中間を堰き止めた大貯水池に、自然に流れ込む雨水を溜める事になつてゐるので、旱魃で降雨が無いとなると悲惨なものである。地質の關係で、何處を掘つても水が出ると言ふ譯にもいかぬので、井戸水によつて此問題を解決する事が出来ぬ所に悩みが有る。水が不足となると直ぐ制限給水をする。朝七時から午後三時迄出るのはまだいい方で、僅か。に、水道の水はまるで塩水を飲む感があり、工場では之が爲に色々の故障を併發し、家庭では不味い／＼お茶を飲むことにな。中でも最もみじめなのは停水中の出火だ。幸に木造家屋の建築を許されてゐない大連では、大火らしいものが無くて済んだが、水の出ない時の消防の苦心は想像に難くないと思ふ。風呂屋は廢業に瀕し、家庭でも夏期も三日に一度位しか入浴が許されぬ。庭園は赤茶けるし、便所の水にも困る仕末、水の無い地方に來て初めてこの苦しさを知つて頂けると思ふ。處が嬉しや先日来滿洲は雨期に入つたのであこがれの降雨が毎日々々續いた。其結果今日から一ヶ月間を限り制限給水を撤廢すると言ふ布令が出た譯だ、水道をひねると、何時でもシャヤツと氣持よく甘露のような水が出て呉れる。吾々は今、急に裕福なお旦那様になつたやうな、いゝ氣分になつてゐる。

吾々自動車は？ 歌田 森 半 疊。八月三日朝。新米の女中が不審顔で、附箋を背負つた森半疊宛の手紙を夫妻きり世帯の私に「こんな人が内に居ますか？」とつきつけた。夜。公會堂での關印資源確保講演會で自動車業者會長和田某は朗讀演説中、興奮の餘り「吾々自動車は……」に無抑揚と唇さでうだつて居た聽衆、皮肉な拍手を浴せて會長暫くは立往生。

武玉川四編研究 (十)

梅 本 塵 山
森 子 東 魚 二
蛭 子 省 二

(235) 怖い異見も開て居るうち

東魚 咽喉元過ぎて、直ぐ熱さを忘れる。
塵山 是れが所謂龍耳と云ふのである。

省二 性根がくさりかけて居る。——然し異見といふもの、なか／＼悉くが身にしみるものではない。

(236) 千草も少 礎る袖下
省二 判らぬ。

東魚 秋草が枯れきらずに、垣の袖下に残つて居るといふやうな事ではなからうか「袖」だけで「垣」とするは無理であらうが。

塵山 前説に賛成はするが、「袖下」は如何にも拙いと思ふ。

省二 私には袖下を正直にとつた爲に、千草を色合としたので、大變苦しむでしまつた。

(237) 美しく夜の明る 貌見せ

東魚 女中達が朝暗いうちから化粧をし、顔見世見物の仕度、いそ／＼としてゐる場合、洵に美しく夜の明ける事である。

塵山 女中達の顔が美しいと云ふのではなく、劇場の表掛りの、黎明の光景が美しいので、昔の顔見世には、木戸前に酒樽、菓子、蒸籠、炭俵等を積物としたのである。

省二 此句も兩説どちらにも解せられる。顔見世を待つ女に關する句は澤山あるから、「美しく」といふ言葉からの感じ上、解釋に迷ひを生ずる。たゞ「仰山に夜の明ける顔見世」なる古句から推量すると、塵山翁説になつてくる。

(238) 膳へも蟹の上る 掛川

省二 遠江小笠郡に在り。宿驛氣分を現はした作。「打ちわたり波さへ袖にかけ川や、いとぬれそふ秋のむら雨」など詠まる。(掛川は葛布、茶、蘆を名産とす。)

東魚 事實であらう。これも旅の一風景。塵山 掛川宿は海に遠いのであるが、何故に此處へ蟹を持ち來つたのか、前に擧げられた歌に、「打渡す波さへ」とあるけれども、其様な川ではないやうである。

(239) 媒に頼んだ 顔の何喰す
東魚 何喰はぬ顔で仲人を頼んだが、實は本人同志の間には、話が成立してゐると云ふのであらう。

塵山 媒の外の人々に對して、何喰はぬ顔をするのではない歟。
省二 私もさう思ふ。

(240) 小夜千鳥氷のうへのこほれ物
省二 夜、氷上に千鳥が居るのは、確に零物の感じがする。

東魚 點々と居すくまつてゐるさまであらう。
塵山 「こほれ物」は云ひ得て宜し。如何にも多日の光景が表現されてゐる。

(241) 帯をすする間の草にふる 敷
東魚 野遊びの場合か。敷物代りに風呂敷を草へ敷いて、帯を直すのであらう。

塵山 風呂敷敷をしくのではなく、その包を草の上に置くのである。
省二 私には東魚氏説の如くに解する。順禮の帯仕直すも笠の上(金砂子下)

(242) 草臥た時おもひ出す 恩

省二 私には宿病があるので、この註譯も梅上で認めて居る、常に寝込む。看護の恩を思ふ切である。「心で人を拜むわづらひ」(金砂子下)だ。草臥た折も亦等しい。

東魚 苦しい時に有難味は分る。
塵山 是れは始めて旅行の苦楚を嘗め、親の恩や都會に住む恩を悟るのである。

省二 いかにも、旅途の草臥疲勞なれば、所謂旅愁も加はつて、「恩」が十分に働く。

(243) 朝霜に早い大工の案をすゝり

東魚 仕事場へ霜のあるうちに着て、先一ツ服してゐる場合。
塵山 此の大工の勤勉甚だ頼もし。

省二 朝霜の寒さに茶を喫す。「大工」で可。

(244) 朝顔ハ今歸つたかかしわもち

東魚 朝顔が歸つて來るなり、柏餅になつて「睡」をむさぼる。「歸つたが」の意であらう。

塵山 「朝顔」はのが疑問であるが、柏餅は蒲團に相違ない。

省二 いかにもネ朝顔と朝顔の古川柳、夜遊びと朝顔の古俳句共に多々ある。柏餅は「柏餅」と松との間をこぎ。「寝姿のうちでやしき柏餅」(武12)

(245) 煩ふ形の見へぬ 病葉

東魚 病葉は枯れたと云ふ顔もなく。ぼたりと落ちるから、斯く詠んだのであらう。

塵山 前説賛成。

省二 わくらばは、夏季に黄色に變り又は蝕むで落つるのだから、寧ろ煩ふ形に見立て得る。落葉なら死んだ形——理屈を云ふ程の句ではないが。

(246) 平元結一日つゝのへりあり

省二 平元結は丈長の前身、勿論用途は等し。杉原などをたゝむで用ひしもの、「一日つゝの締り」で髪の手入れが思はれる。
東魚 一日の氣分を支配するほどでもあらう。「一日の機嫌も帶のしめ心」が初編にある。

塵山 毎日取替へて締るのか。それならば少し奢りの沙汰である。

(247) 材木買に智識逗留

東魚 寺建立の材木を、自ら買ひに智識の僧が、逗留してゐるのであらう。智識と俗事を結びつけた處がヤマ。

塵山 木曾の山村であらう。
省二 (買)は相談に、位に解して置こう。

「大僧正も材木を問」(武2)

(248) 誕生のころほとゝきす比

省二 四月八日はお釋迦の御誕生。時鳥の候。「寺々で産湯わかすと時鳥」

東魚 佛の誕生と時鳥の例句は數々あるが、かう云ふ詠み方は珍らしい。

塵山 例の重語體であるが、材料も古く巧妙の句とは思はれぬ。

省二 十四字では、斯る句風はねらはれるもの、「異見する顔格氣する顔」(金砂子下)。

(249) 役者の荷物はつ雲か降

東魚 顔見世に下る役者の荷でもあらうか

大阪 名物 松山温泉 松前屋 本舗 心齋橋筋 出店 朝日ビル 専門大店 電話 四六六番 八二〇番



松坂俱樂部

會員募集

あらゆる趣味のお稽古場

手はごきから奥義まで
氣輕く、樂しく、御上達

お稽古
種目

- 長樂 常盤 鳴小 物唄
- 尺八 箏 琴 笛
- 八曲 曲 謡 能 樂
- 曲 踊 曲 鼓
- ヒ ア ノ
- 書 畫 道
- 茶 本 道
- 華 洋 料 理
- 華 洋 裁 縫
- 氣 棋
- 松坂レコード
- 道 學

川柳講座

川柳雜誌主幹

麻生路郎先生

擔當

御申込は
七階松坂俱樂部
電話(代表)三〇〇三番

松坂屋

大阪 日本橋

- 聖山「前解の如くで、十月中の旅行であるから、初雪に逢ふのである。」
- 省二「役者の駕にしろ見送る(武3)と列べてよい句。
- (250) 世の中を忘れたやうな翳の中
- 省二「蚊帳の中に入れば、あの四角さだけが天下となる。世事を忘れて寝た程樂が世にあらか。
- 東魚「簡易な安住の姿。
- 聖山「安樂世界は、五六の帳中に在り。
- (251) 寒そうに鼠の覗くからけ鏡
- 東魚「四貫からげとか、五貫からげとかに括った、鏡が置かれてある。火影も鈍い夜更けたさま。
- 聖山「紫銭は四五貫よりも、少い方が寒冷を感じるであらう。
- 省二「錢箱の中をみてゐる飼鼠(金砂子下)
- (252) 眠たがる鷺に田植の笠か行
- 省二「眠たがる」の感じを延長させて、田植歸りの笠であらう。——田植と鷺とは取合せとなる。「田植より笠著ぬ鷺の色白し」(也有)。
- 東魚「煙雨の趣も想はれる。
- 聖山「田植の歸りでなくも宜しからう。鷺は何時でも眠さうな姿をして居る。
- (253) 奢る姿の幟見て居る
- 東魚「世繼ぎを生んで、得意の絶頂なのであらう。
- 聖山「奢る者久しからず、本妻の嫉妬を思へ。」
- 省二「破魔馬を妾は腰で勘定し」「幟を産んで直に女房」
- (254) 若後家の草臥て居る泉岳寺
- 省二「墓參。氣疲れもある。平凡。
- 東魚「泉岳寺參り。若後家だけ身につまされる事も多い。
- 聖山「泉岳寺に若後家、古い」と云ふ可し。
- (255) 格氣して仕當る事もニツ三つ
- 東魚「格氣が、却てとんだ思はぬ好結果をもたらす事も間々ある。
- 聖山「何を仕當るのであらう歟。夫れを穿鑿するに及ばぬが、少し物足らぬやうである。
- 省二「私は夫婦喧嘩獎勵論など書いた事がある。格氣も亦獎勵して無駄でない場合が、二つ三つどころか、まだ有るであらう。
- (256) 神の前小言のやうに伏拜ミ
- 省二「神詣は口のうちに、何にか祈りつゝ伏し拜む。
- 東魚「ぶつ／＼云ふにしても、「小言」はちと適切ではない。
- 聖山「姑婆の神拜ならば、小言のやうで有るかも知れぬ。
- (257) 質屋を拜む戀の黄昏
- 東魚「これから彼女のところへ逢ひにゆくのだ。頼む云ふだけ貸してくれとの場合。
- 聖山「此の戀は頗る安價で、三十一文字には成りかねる。
- 省二「前二解で盡されてあるが、「拜む」にこだはつて考へると、道行と一段進んだ場合にとり度くなる。
- (258) 山椒は皮をへかれて郭公
- 省二「山椒の皮剝くは俳諧季題晩春のもの。食用にする。郭公は初夏のもの。
- 東魚「初夏の清新な氣分が感じられる。
- 聖山「山村の初夏の光景であらうが、少しも厭味の無い佳句。
- (259) 翠簾から聲のかゝる出遣い
- 東魚「出遣ひは人形を遣ふので、翠簾はみす内て語つてゐるのであらう。
- 聖山「昔は大内にも、傀儡を召された事が有つたやうである。
- 省二「出遣は辰松八郎兵衛から始まるとの説あり。
- (260) 麓寺ちひり／＼と立田姫
- 省二「麓の寺の紅葉が、少しづつ色をなしかけた風景。「立田姫一葉／＼に世話がやけ」(武13)。
- 東魚「漸く秋色の深からんとする趣。佗びた寺が表はれる。
- 聖山「紅葉は峰が速く、麓の方が遅い故、「ちひり／＼」と云ふのである。
- (261) 虚無僧の日和程つゝ反りか來ル
- 東魚「天蓋が乾き、反り氣味になると云ふのであらう。
- 聖山「此の中七は甚だ拙い。
- 省二「私は解し得なかつた。失禮ではあるが解釋を讀むでも、未だピッタリと納得されぬ。結局中七が無理なのではないか。十六篇に「虚無僧の顔へこまかに日があたり」。此日當りに關聯して、虚無僧が反るのかと思つてゐた。
- (262) しら鷺は五位鷺よりも暮殘
- 省二「五位は脊黒く、腹から脚へ黄。だから、白鷺の方が暮殘る感じが有る。
- 東魚「御尤といふやうなものだが、何かなし輕いユーモアを感じる。
- 聖山「黒白相對して後に、漸く暮殘るをくつ附けたやうである。
- 省二「六篇に五位鷺は白鷺よりも反返り」

論壇



人間性と純粹性

葎乃女史他二氏に答ふ

高 鷲 亞 鈍

僕は五尺そく／＼の小男で而も目方は十六貫は優にある。遠慮のない友人が、おいドングリと呼んだら、何に？、と返事はするが心中はやりきれない氣持であるのである。小さく太つてをればドングリに響へられても、ドングリが別に悪いものぢやないから、といった反省する程度膽の大きな人間ぢやなく、又ドングリと呼ぶ友人の方では愛稱のつもりで言つたのであり、決して侮辱の意味ではないと判つてゐても、ちやんとした親から貰つた名前があるのに怨めしい、とさへ思ふのである。猿！と呶鳴られても平氣で居つたのは末に天下を取つた秀吉の神器であり、凡そ吾々凡夫にしたら一應は癪にも觸ることだらう。虫や動物や魚類に譬へられて、人間が萬物の靈長といふ超越觀念からして怪しからんといふのではない。或ひは多少、それが潜在意識的に入つてゐるとしても、僕の肚立しく思ふのは、人間は人間としての存在を意義づければ可いぢやないかと考へるので、喩へるそれ自身が不可といふのである。首が長ければキリンといひ、眼の飛出てる人を出目金、顔が長けれ

ればヒューマニテイである。其故に今や明瞭になつた事は葎乃女史は、一切衆生の佛教觀があり、僕は基督教的人本主義的なロマンチケルな態度であつた。但し女史の駁文の中の「句はヒューマニテイを超越すべきもの」といふ變延言葉の解釋には苦しめられた。ヒューマニテイを人道的な意味に解されたのとは違ふかしらん。この葎乃女史のいふ意味はヒューマニテイのない世界も句の中にはあると解して可いかしらんと思ふ。換言すれば、句の純粹性を指して言つてゐられるらしい。川柳句はヒューマニテイを超越すべきもの、といふ約束はまだ僕は知らないし、凡そ文學の世界にヒューマニテイのない文學は皆無だからである。少くとも川柳が自然よりも寧ろ人間を對象にする世界であるなら、ヒューマニテイは、熱情をもつてしても、冷靜をもつてしても、頭として支へてゆく可きである事が今後の川柳人の使命でなければならぬと考へる。ヒューマニテイの無い詩の純粹性とは藝術美學のカテゴリであり、フィードレル的なものである。英國のブラッドリ教授の詩論もさういつた純粹性を狙つたのである。近くはフランスのポール・バアレリイなどもさうである。然し彼らのボエージュ・ビュールは決してメルヘンの世界であつたり、ミユトスの世界であつたのではない。葎乃女史の句の中のある童謠的な純粹性は藝術に於ける最も幼稚な、原始的なものであり、無意識、自然發生的なものとして價值少きものである。あの初蚊帷の句を、軽く、他意ない見方をして除けるのが、まづ一等正着な解釋ではないかと僕は思ふ。それは東魚さん

と同感である。然し、東魚さん自身も言はれてゐる如く、さう單純に解釋するのは實に頭が古いと言つてよろしく、吾々はさういつた從來の印象の感想に甘んじ、いかやうく表現してまづね、とか、なか／＼涼しさうな句ですね、とかいつた萬事〇、K式の批評は避ける可きであり、何處までも作者の句とその態度にまで、客觀的な知性で計算する厳しさを持つ可きであると信ずる。例へば路郎師の有名な句。

夕櫻トンボ返りがしてみたし
君見給へはうれん草がのびて

の二句は確かに句から、ヒューマニテイを見出すことは出来ない。それはたゞ人間をきわめて純粹にした境地であり、人間本然のナイーブそのものであつたからだ。即ちこの句は、川柳

を通して、何かを訴へやうとする所謂句の功利性を持たずして、句の絕對性の故に吾々は價值高きものである。而してこの句にはエスティックもなければモディファイもない。いはんや文法的にどうのこうのと、七面倒臭い個所はどこにもない。これは即ち、バアレリイなどと同時に登場した論敵で、一方の純粹詩派を代表するカトリックの牧師アンリ・ブレモン師のいふ純粹性であつた。所謂主知で計算する數學的な純粹性ではなく、人間内部の純粹維續によるベルグソニズム的な純粹性であり、路郎師の二句はそれ故に句高き名句として認める可きなのであつた。一體川柳の分野に斯る純粹性を目懸けて精進するの僕も決して悪いことではなからう。然し乍ら本來の川柳は、やはりヒューマニテイの解放にその存在理由を認めなければならぬと僕は考へる。



布哇の女性

前山 北海

クあんたもいつまでも一人ぢや淋しからう、茶飲み友達でもいつか首を縦に振る未亡人貰つちやどうだ。ひとつわしがいゝ人を世話して上げようぢやないかククそうです喃、わしもそう思つてゐたところだ、ぢやひとつお願いしようかクと云つた譯でSがコナ珈琲で名も高い布哇島コナの田舎からヒロの町へ出て來た。あちらこちらと探し廻つた後家さんは誰も「ぢや頼みませうか」とは云はなかつた。いくら先方は珈琲で儲けてをり、親切ないゝ人で一生あんたを可愛がつて呉れよう、俺に誰もないこんな氣楽れんさい。ク

貧乏人の子澤山と昔から相場は決つてゐる。ろくなお菜もないのでやたらに飯ばかり搦つ込む。砂糖耕地の勞働者も子供の太る盛りは仲々並大抵ぢやない。一人働きて子供の六七人もあると學校へはやらねばならぬし、人並みの着物もと云つたらストアの方はいつもバランスが絶えぬ。先づ米二俵食べる頃が一番辛いと云はれてゐる。ところから米の三俵も要る頃迄辛抱する、上の子の三三人は働いてベイデーにはそれ／＼一人前にパイ・エンペローブを投げていそ／＼と歸つて來る。先づ米の三俵も要る家ならいくら貸しても倒されつことはない云はれてゐる。

陰ながら不自由のない未亡人

某月某日の出来事

(其の三)

危機を脱す

今治 長野文庫

衝突された方は衝突と同時に横轉した。自轉車も少し痛んだらしい。罪は衝突した方に有る。起き上るや衝突した相手に文句をつけてやらうと心に腕まくりしてよく見ればコワ如何に相手も數米の向ふの地上で横腹を押へてウーン／＼唸つて居る。衝突した時に横腹でも打つたものらしい。どうもあの様子ではコチラより向ふの方が少しヒドイ様だがコリヤウカ／＼係り合ひになつては大變と思つたか振り上げた拳をそのまゝ傷んだ自轉車を抱へる様にして何處かへ去つてしまつた。衝突した方は相手が去るや否や威勢よく起き上り自轉車に飛乗つて悠々退却した。

鑑 醫 者

大阪 北川春巢

A「最近結婚しましたよ」
B「結婚したつて？それはお目出度う、して花嫁さんはどんな人？」
A「花嫁さん？あッハ……どん

なつて一寸言へませんが、此の間もうちのあたり大きな夕立がありましたね、それが止みかけた時雷の聲がしたしたので僕が『もう雨も上るよ、雀が出て来たから』と云ひますとね、家内のやつ『あゝ嬉しい、うちの藪もだい／＼茂つたと見える、雀が来るやうになつた』なんて云ふんですよ」

合 唱

廣島 濱田久米雄

満二才になつた娘が歌を覚えて近所の子の間に評判とは聞いてゐるが、今日家へ着くと僕の子を取巻いてまだ合唱の最中「まんやん／＼ハッポッポ」まんやん／＼は豆をやるから、ハッポッポ鳩ぼつぼの意。

犬

大阪 田中葉風

うちの裏手にとても犬好きの夫婦が居る「抱つこして玉子焼買ひに行こ」とか「お母ちゃんねんねしよう」とかは常時の事で、一寸物の食べ様が少ないと云つては醫者や注射やと大さわぎをする。犬見舞に來た人「ぼんぼんをお大事に」と歸つたので、子供は無い筈ぢやがと思つて居ると犬の事だつた。餘り可笑いので大笑ひしてゐるとこへ川雜から便りがとゞいた。十日の話。

くろーずあつふ

兵庫縣 水谷鮎美

處 兵庫縣武庫郡大庄村
時 靜かなる夏の夕
人 母、小生、妻、長男、長女、二女、二男
稻の風が青く腫にはいるころ夕顔の白ろき蕾を一家總動員で見ると刻々にひらきはじむ神祕さにおもはず聲を出した。數分のちには立派な花として薫つた七人の魂にくろーずあつふしたこの幸福な一輪は心の細の如く暮色蒼然たるなかにましろくにんげんの希望の華ともみえてゐた。

又 悲 鳴

愛媛縣 米澤曉明

水泳教授最中悲鳴を聞く。見ると川端に住む兒童だ。馬鹿な眞似と思つてゐると又悲鳴。驚くものか。又悲鳴。サテハとよく見ると本物だ。電撃又電撃。戦火収めて悠々歸還。「やれこれで自分の首も助かつた」

199に1

石川縣 松島みどり葉

199時局川柳を見て上の番號に氣がつき1を加へると200一寸の事であるが何となく言ひ表せぬものがある。199に1を加へると200になる事に。

貝の汁

大阪府 宮岡白峯

起される事なく午前五時制服の人となり萬の人間の足の代用品を配置し、九時朝の句會川柳四ツ橋にて數句をものし、十一時桃山病院の雜儀に參列。十二時六ツの手のつく疊を踏んで制服を脱ぎ食卓に向ふ。胃袋へは外米の外に、トマト、乾魚、貝の汁等、母ちゃんカイ、カイ、公子背中をかいてもやどれカイ、カイ、曰くカイの汁ですよへ靜かな食卓へ爆笑が起る。

米三條安心をして店も貸し

香菓はあつさり棒を引くノート

したものである。之ぢや地下の亭主も浮ばれぬかも知れぬが、可愛い子供が健かに延びて行くのを陰ながら眺めては觀念の眼を閉じ

處で、貧乏の子澤山で女房の世帯やつれを氣の毒がられてゐる様な家でも、どうかした拍子に亭主がころりといつてしもふ。さあ大變と思ふとさにあらず、個人主義の米國領土内の布哇では、亭主の借金は亭主一代限り、假令女房へたんまり保険金が入つたところで、之を借金のかたへは表からぢや取れぬ。

親の借金だからとて子には責任がない。こゝの道理を辨へたちやつとした母子にかゝつた貸主は全くお氣の毒みたいなのものである。民事貸借も六年過ぎたら時効にかかつてしもふ。むしろあつさり駢斗をつけ進上した方が催促する免れもなくてかへつて氣がせい／＼する位のものである。

慰問袋に 國産家庭常備薬

ルメルペ

ハイキングに

主効 傷一切に 顔刺後に 化粧下に スポーツに 火傷に

社合式株有限本日大

ルメルペ

なこつちや、と世間から同情はされる。色々と親切に世話する奇特な獨身者も出て來ようと云ふ段取になる。世帯寢れの女房も後家になつてからいつとはなしに昔の色香を取り戻さんものでもない。亭主の死後は返つて暮し向きも樂になつて子供を育てて行くなんて全く世間はよく借金と別に遺族の暮し向き

岩佐醫學博士 富強毛力新



◎ウス毛、ハゲ、ヌケ毛ハ毛芽デ全ク解消!!
◎毛芽ハ老若ヲ問ハズ毛根アル所必ズ毛生セシム!!
◎今般毛ノ最速季節毛根ヲ深達性ノ三大條件ヲ完全ニ具備シ多年ノ研究ト實驗ニヨリ完成セル毛芽ノ適用ヲ是非御體メナシム
◎毛根ハ毛根衰ヘタル毛根、榮養不良ノ毛根等々ニ是非毛芽デ活、ト榮養ヲ忠カフ與ヘテ下サイソシテ時局下心身共ニ明朗ニ活躍シテ下サイ
◎今般如何様ナ方法ニモ効果ヲ得サリシ方モ特ニ今一度コノ毛芽ヲ御試用下サイ
キツト驚クベキ偉効ヲ御體メ下サルデシヨウ
……使用簡便一日一回ノ塗布デ有効充分……

大阪府 濱田久米雄
小 川 屋 本 舗
地方薬店、化粧品店、美理容院
其他ニテ販賣御希望ノ方ハ御申
越下サイ
説明書無代進呈 發賣元
定價金 參圓五拾錢 (三〇五入)
送料 金拾五錢



貝

★
岡田某

驢馬を持った男。山の中にある。
自轉車を持った男。町に
し切つてゐる。
どつちも仕事がなくつて退屈

狸

前田 五 健

此の淨願寺は智恩院派の淨土宗で松平家でも格式の高いお寺である。現在は市區改制やら學校の爲めに境内は狭められて昔の佛は無いが、それでも相當に廣い山門の向つて左に堂宇があり鳥居が重なり列んで、「白禿大明神の額が掲げられて居る。「ヤアどうも、よくお訪ね下さいました、新田芙蓉さんとも常々お噂して居りました、宗旨の關係で松山の大林寺へ時々行きますが是非又寄らせて貰ひませう。」

至つて氣輕な方丈さんで狸の話色々聞かせて貰つた。新田芙蓉さんは矢張り川柳人で私の調査に大變骨折つて下さつた隠れたる狸研究後援家である。私が秘藏の白禿大明神の畫像も新田さんのお骨折りで、高松で唯一幅ある八木家から借り出し模寫したもので、畫像には白禿

どつちも、あんまり平和すぎて腹を立てゝゐる。
＊
年度末。墨汁がねばつてゐる。
＊
誤字、脱字、これ位ものがないものはない。まして本人にとつてそれが誤つた記憶によるものでなく、知つてゐながらふらふらと書いてしまつてから氣が付くなんて實に堪らないことだ。

＊
譯の便所の傍。五尺ばかりの何かの木。ゆぶぐれの家路へ急ぐ人びとへ、ちよぼちよぼと小さな明るみをともしてゐる。この燃え出てるものを見ることは、ほつとするやうな氣分と共に、何かむらむらと身體の中に新しいものが湧き上るのをおぼえさせ、まことに香氣高い一瞬である。
＊
海賊旗の骸骨の繪。これは美

＊
學にかなつてゐる。妙くとも生理的ないやらしさはない。然もこのぶつちがへた臍骨やその上の體腔を一つ一つ離すともう駄目なんだから、おかしいものである。
＊
別にそう考へ込むことはない筈なのに何か考へねばならぬ様な氣がしていららする。しかもそれが一體何だつたか、何であるか皆目判らないなんて實に

＊
やり切れたものではない。
＊
行きづまり。こいつは益死にかざるらしい。行きづまりで割腹するなんて一寸見當ちがひのやうだ。割腹はどうしても申しひらきだし、毒藥、これは女の匂ひがする。ガスは借金。
＊
ち食ふとんち
店 湖月
ちたはまき寺境に向

某月某日の出来事 (其の四)
病 中 日 記
東京 橋本波夢造
八月五日(月)曇後晴 涼
こゝ四五日つゞいて涼しい。朝の診察後病院の屋上に出る。東京もこゝ山の手は一帯に樹木が多い。もうミン／＼蟬やつつく法師が盛に啼いてゐる。隣室のT氏看護婦のFさんと屋上の亭に話す。恢復期の病人は朗かだ。話も頗る罪が無い。
一、看護婦の足音で食事のお菜

が判る話
一、雑誌を見ても新聞を見ても自分の病氣の藥が眼につく話
一、病人が好む本に啄木歌集と講談料理の本が多い話
一、女性の患者は非常に世話し難いと云ふ話
一、死んでもよいこの用事を済ましてから入院すると云つたある商店の主人の話
一、悲壯だつた、苦しがつた、あつた話かつた臨終の話
一、旅の話、うまいものゝ話、映畫が見たい等々々々
晝のサイレンが空腹に響く。

驚いて室に歸へる。食前の水藥を忘れた。
今日はパンの日だ。東京のパン屋は切つても呉るし、別に三錢出せばバタも塗つて呉れる。雑誌を買ふとそこの家の廣告紙ではあるが表紙をうまく包める様に細工したもので包んで呉れる。汚れなくて良い。
どうも小商人は大阪より東京の方がずつと親切だと思ふ。
夜久方ぶりの入浴。脚の垢がいくら擦つても出て来るのに嫌になつた。
ラヂオの演藝に府縣めぐり岐



募集句

一路集

極樂 豆秋選

極樂の氣儘は婆娑へ出て見たし
極樂は櫻の花も咲くところ
猫いらず飲み極樂へ行くつもり
極樂へ行つたらしいが便りなし
極樂へ来て見て和尚見當らず
念佛は極樂へ行く歌謡曲
一億里とか極樂へ草鞋で出
極樂を天に描いて金がない
極樂へ渡る火葬に上中下
極樂へ何時でも行ける寺詣り
法燈のゆれて極樂身に迫る
母なれば極樂逝きを疑はず
極樂をちつと見つめて道白し
極樂の入口罪を咎められ
湯上りのに縁極樂そなた顔
注射針極樂行と思へども
曼陀羅華降らして極樂見せてゐる
極樂があんまり近い墓の墓
一合で極樂へ行くよい疲れ
極樂へ乞食茶碗を一つ持ち
極樂の空は天女が邪魔になり
(客)極樂が良いかやつぱり歸らぬ
(客)極樂のところで説教聲が張り
(客)極樂へ行けよと棺を西に向け
(客)酔つた眼に極樂が見え始め
(人)極樂へ行かす草鞋をつけて
(地)孫抱いて極樂にゆく顔になり
(天)極樂の静かさへ蟬一つ来る
(軸)欠伸してゐるあろう彌陀淨土

豚 柳路選

焼豚で算段付けた酒を呑み
流弾をやつと逃れた豚の息
日曜日よせ鍋つゝく豚の味
別荘が出来て豚小屋移される

秀雄 同 秀雄 抱逸

親豚に負けぬ小豚のよこれ様
放飼ひ豚も嬉しい草枕
輪の様にシッポを振つて豚太る
待ち兼ねた残飯へ豚の鼻丸し
豚の悲鳴かまはずトラツクは走り
豚を手に町の土産をたのまれる
入城へ献上の豚擔ぎ込み
食ふ事の外に豚共望みなし
入城は豚が走つただけの事
大陸は豚の群れからひらけてき
移動する部隊へ豚も連れられて
他愛なく犬に追はれた豚の群
交代の夜の歩哨へ豚動き
喰べられる豚トラツクに眠つて
一團ひ豚の賣れたる札の數
髯面を豚と寫して此の餘裕
豚のうさとり切つたる顔であり
親豚と子豚とならびのんきさう
賑やかに聲を立ててる屠所の豚
豚の背に鳥とまつて冬近し
豚が賣れたら好きなもの買つて
大陸を思ひ出してる豚饅頭
豚の毛のブラシ美しい歯もみがく
トラツクへ積まれて豚の行く所
國策に豚も一肌ぬぎました
豚程食うと云はれ病みもせず
今朝泣いた豚が夕食の豚となり
豚の尻叩いた棒の方が折れ
何の用あるのか豚のあの尻尾
簡単に豚トラツクへぶちこまれ
豚の子を貰つた家のにぎやかさ
軍票で親豚の豚を買うてくる
圍ひはつせば豚の子が踏まうとくる
兄を抱いて坂を下りたら豚が鳴く
(秀)避難民中に大きな豚がゐた
(秀)人間の笑ひの中に豚積まれ
(秀)我故郷戀人も居る豚もゐる
(秀)豚の群漫々的に追はれて行く
(秀)銃眼を知らない豚が走つて
(秀)戦線のスケッチ柳と豚があり
(秀)哭いてるのか笑つてるのか豚の顔
(秀)スタンピングを擦る豚は身の終り
(軸)ロケーション豚が走り景色なり

同 照波 紫風 光哉 一庫 文庫 同 琴聲 南渡路 青笠 指洋 風來子 寄與史 北海 三味 喜一 透堂 同 同 富士 彌生 童顏 洋城 吼樂 神芳 翠方 宏方 美奈子 己之介 春雷 綠翠 斗風 秀雄 光哉 一庫 文庫 同 琴聲 同 靜觀堂

句の整理

阜縣の巻あり、かつての下呂温
泉行きを想ひ出す。高山の街か
ら眺めた日本アルプスの景観は
一生忘れないうだらう。
十一時消燈。
どこかでチ、と虫が啼く
朝の蟬と云ひも秋になるかと
驚いた。

御影町 長崎 柳秀

この通信をうけた日は自分が
川柳に手を染めてから満十五年
にもなります。是非此の夏休
暇に投句川柳の整理を完成した
いと思ひそれに着手して居りま
した。

昭和十五年八月十一日晝食
の膳に向つた時此の通知を受
取ました。此の日は私の結婚
二十五週年記念日で紀元二千
六百年記念と川柳雑誌二百號
記念と三つの御目出度い事が
重つた様に感じました。

大坂 後藤 青兒

今年三つになる長男、汗で
びつしよりになつた枕カバー
が外して干してあるのを見て
「枕の皮どこ行つたんや」朝は
玄關から抱いて出て裏口から
渡すことになつてゐる。「お父
ちゃん何處行きやほんの」お
勤めですよ」……おつとめ食
べよ」

父の辭世

性來酒好きだつた父、腎臓
炎で入院四十餘日、死期の近
きを悟つた或日。別盃を汲む
と酒を求め一口呑んでみて無
然として曰く「これが酒と云
ふものか」そして辭世の句
すてこの調子を抜けて歸
りけり

大坂 正本 水客

支那の夜

八月十日午後受信、映畫支那
の夜前後篇大會堂鑑封切りとか
で店の女給達が騒ぎ、私しも
甘いところを義妹に誘われるま
ゝ觀に行こうとして居たとこへ
着信。

廣島 石崎 柳石

別して、川柳即生活、川柳の
日本精神等と平素口にせし人達
の現時の捨身の奉公に就て、體
も亦よき哉に御座候。

知らぬが佛?

言ひたい事を言ふべしから
言はねばならぬが、
言ひたくても言へないのだから
同情してもらひたい。
要するに私は佛である。

下田 演田 賢次

ALB 82

急性慢性消化器症

ルジバル

劑法療學化子分高の初最本日

會商品藥内之山 社會式株 京東・阪大

アルバルは日
本に於て最初に
發表せる、二個
のズルフォンア
ミド基を有する
新化學療法劑に
して、連鎖球菌
菌、葡萄球菌等
に基く各科疾患
に對する作用は
各大學大醫院
に於て實驗發表
されたる如く、
驚くべき確性
を有してゐる。

眞の影なるもの潰瘍が痛か確と
せずN醫師「本人に其氣があれ
ば開けたら良い」と申される。
やちやありませんか、奈良漬の
胃を見られたんぢや先祖に對し
てクシヤ申譯がない。十年ばか
り痛さん待つて、頂戴ね。

ちかごろ

別して、川柳即生活、川柳の
日本精神等と平素口にせし人達
の現時の捨身の奉公に就て、體
も亦よき哉に御座候。

知らぬが佛?

言ひたい事を言ふべしから
言はねばならぬが、
言ひたくても言へないのだから
同情してもらひたい。
要するに私は佛である。

下田 演田 賢次

樽柳作近

選郎路生麻



ローソクが描き出したる輪にサソリ 北口支 月原宵明
 水浴の幻惑なる麦千里 同
 敗走の携帶大豆飛散せり 同
 あの顔の顔へ背囊ゆすりあけ 同
 月清く晝の戦ひ嘘のよに 同
 天の川敵を全く圍みし夜 同
 夏草の茂りは砲の車輪まで 同
 ころころ風より先を煤走り 松山 山本耕一路
 八角を矢鱈に描いて蜘蛛疲れ 同
 金策ならびしよぬれの灯がひこつる道 同
 ゴム不足の中に蚯蚓はゴムの色 同
 脊の低い婦さ知るも蚊帳のカン 同
 糸雨の風情を見せる蚊帳の補綴 同
 川蜻蛉川蝦捕が来たを知り 同
 疊替へタンスの位置を替へてみる 西宮 飯尾寄興子
 奇蹟にも運轉手だけ無事だった 同
 バス顛覆して女房の歳が知れ 同
 親だけがきつみなおるさ云うてくれ 同
 看護婦さん歳なごきいてさうする氣 同
 節米の中へ長男生れて來 同
 青空のはてふる里のあるところ 松山 宮内耕朗
 戦友の夢は故郷か親か子か 同
 秋風は故郷の風に似てうれし 同
 小商人今年もやつさ食ふたゞけ 同
 人を焼くけむり眞ッ直ぐ秋の空 同
 長女病篤し 同
 人形と並んで寝息しすまらず 同
 霞乃奥様來遊 同
 氣が合へば話題に盡きぬ口もあり 大磯府 米本貴志子
 内閣更迭近衛内閣再成立 同
 二度目には御下帯を締め給ひ 同

名案も露の乾ぬ間の椅子でした 同
 蚊だのみだんだこの世せまくるし 同
 子ほんのう先生様を買ひあさり 同
 電髪で逝く青春へ抗議をし 岡山 本田静江
 告白にその告白に上衣脱ぎ 同
 成長のプロセス或る日哲學書 同
 青春の過剰喫茶の隅をより 同
 感情を殺して女誤解され 同
 炎天のはらみ女は牛に似て 大阪 富岡巨人
 俄雨添寝の乳をもぎはなし 同
 蜘蛛の巣にかゝりし蠅の如き身よ 同
 節米を知事よ毎日やつさるか 同
 道草の子は雨蛙見て居たり 同
 雨乞ひの雨降りすぎて又祈り 神戸 卑上一扇
 瑞鳥もついでさつき迄只の鳥 同
 云ひ出した節米親父先づ参り 同
 飯食ふなごさ奥の手親父出し 同
 病床の退屈さから子に當り 同
 病院の外は祭の笛の音 名古屋 鈴木可香
 暫くは夜汽車の窓に風を入れ 同
 兩親を忘れるほごの圓滿さ 同
 腕力を逃けて社長は飲んでる 同
 モーニング笑つてならぬ席さ知る 同
 女への虚勢うっかり嘘を云ふ 大阪 山本華光
 女の慾を吐る 大 慾 同
 美しく生れて意志が弱すぎた 同
 愛人の母に孝行を盡すなり 同
 立ち讀みが歸へり本屋は置きかへる 同
 あまりにも小さき湯呑み女事務 廣島 石原伯峯
 若夫婦おもちのやうに子をあやし 同
 年若き四人の眼が澄んでいな 同

随想 浴衣がけ



安川久留美

須磨の海に溺死した藤村青明
 君の辭世となつた句は
 初句であつた。

書顔は打揚げら

といふ悲しい現實を詠んであ
 つた。今も青明君を「書顔忌」と
 して營んでゐるかどうか、神戸
 の川柳消息を私は知らない。

八月二日の炎熱——書顔忌に
 偶々「名俳句集」を繕くと大書
 といへる故人の句に

書顔や魚打ち
 あぐる砂の上

てふ句を發見した、青明君の
 作と對照して「人」と「魚」の差こ
 そあれ、正しく類想である。

青明逝きて二十五年目？須磨
 の海は魚鱗ひらめくも、死んだ
 人は永遠に歸つて來ない。

白く笑ふ波がしらを見て
 須磨の荒れ

死んだ男が泣いてゐる
 の句を作つたのは即ち二十五年
 前初對面の路郎先生と須磨の、

（八月二日記）

青明君への弔吟でもいふと思
 ふ、路郎先生の健康を祈る。

つて來る旅なりし

去の人である。

七十何歳までは必ず定命を保
 つといへる路郎先生と、最近百
 四才迄は生きると確信した私は
 どうしても海見ゆる關西の地
 に、路郎先生の句碑を建てやう
 と思ふ、句は

浴衣がけちよと行

水虫新治
 療劑
 セロポン



ミツムシ
 シラクモサ
 ハンタケ
 痒い病にセロポン
 一町野平區東市阪大
 部藥新松井白 元賣發
 番四八六六六阪大替振



書郎二幸谷柴

針人千

掌 御時勢

小畑自由朗

火鉢の隅でゴッソ！と頭を一つ打つて居眠りからさめたお婆さん、

「やうまああんなおぼけた約束をさうな誰の手がなけりやしよ

「ソレから私は北濱の事務所に出動したら、

料理 白蘭 土佐堀船町 典雅な日本座敷

「高いびきだすわ」「ほんに、若い者ンちゆう者ンは」

「市丸だの、三龜松だの、一郎秀でた人々が、

布哇 ミルキャンブだより

長谷川 猿吉

我がキャンブは海より明けて山へ暮れ、眼下は百尺二百尺の切り岸に太平洋の大波砕けて生れた冷風、四時キャンブを訪れて七十度前後を保つてゐる。衛生施設が完備してゐる蚊、蚤、虱、蠅等の寄生虫は絶無と云ふていゝ。夜は何時も中布團で安眠出来、苦しいなんて事はない。キャンブからならだかに一足登りに一萬三千尺のマウナケヤ山へ、九月末から翌三四月まで山の腹に白雪が残つてゐる。キャンブから四五哩上まで蕉島で其の上は冷気で蕉に適しない。千古の森林で人足絶えてゐる。寄合キャンブ白シャツ組はスコット人、頭敷から云へば日本人、比嶋人、ボルネガル人、スペイン人、支那人、日本半島人、ロシア人、ドイツ人、土人カナカ等、野もミールも重要な仕事は日本人が獨占してゐる。常用語は英語、娛樂機關全部完備してゐる。斯くの如き集合人種が一家内の如く睦しく嬉々として働いてゐる。戦争の話等する者もない。日本人同士が話合ふ位な者である。



地耕オケベの住居等君州各・村柳・吉旅

個性

大阪 好崎 申仙

私は今チヨベ一醉してゐる時局柄(醉)ふと云ふ字句は嚴禁しなければ成らない時に誠に申譯ないと思ふ。

然し舊信の日は日曜日で私の家庭日である。私の家庭日は家族引連れ外出するのが目的でない。當日は夏季大掃除の午前十時前後の壯行會に招かれて少し遅れて歸宅、朝の眠は少し後れた。然し大掃除は意識してゐるらしい。午前六時頃と私考する、七時現在にて決行しますと誰か衛生員らしい聲を耳にした。カップとはね起る、私は起きない、外は雨が降つてゐる。

八時内外雨は止んだ。近所は疊をたゝき初めた。今日は大掃除は出来ないとした。申仙は誰が何んと云はうとも今日大掃除をしないと決めては見たが大勢は如何ともしがたい。つられて大掃除をしてしまつた。午後一時個性のチヨベ一に酔つてゐる。

節米・代用食

實行されてゐる節米方法と斯うしたと思はれる節米案並びに、實行されてゐる代用食に対する諸家の解答。願不同(編輯局)

兵庫縣 長崎 柳秀

節米十數年にわたる糖尿病で節米はズット以前から續けて居りますが、近年は朝が「パン」晝は「うどん」晩は殆んど副食物ばかり。

代用食は偏食は健康に障ると思ひますが一日に一度ぐらゐ、適當な自分の好きな代用食を探るのは差支へは無いでせう。自分分は麥飯でも「パン」でも麵類でも好きです折々色々替えて居ります。何れにしても身に合ふ代用食が良しでせう。

節米と節漢字

尾崎 小林 文月

節米は太いにやるべし。節漢字、太いにやるべし。漢字は常用五百字で足るべし。代用食は太いに喰ふべし。漢字の代りに、カタカナ左横書きで事足るべし。

朝食

名古屋 吉田 水車

これは別段に珍らしい事柄ではありませぬ。朝食をばよくことは私に關すること恐縮ですがたしかによいと思ひます。私は朝食が一番まづいと言ふ健康上の理由からずつと前より朝食をとりませぬ。それが今はしなくも節米運動と結びついたと言ふのはどうも附會の辯となりませんが健康と環境とによつて誰にでもとすめる譯に行きませぬが許す限りこれを實行するならば一石二鳥の好果があると信じます。

大阪 戸田 孤蓬

節米も代用食も煎じ詰めてとマツチや砂糖の様に切符制に落ちつてしまふ。全生活の分野が完全に計畫經濟化されたら生きて行くに最低の保証を得るための努力はさす必要はない。

節米も代用食も煎じ詰めてとマツチや砂糖の様に切符制に落ちつてしまふ。全生活の分野が完全に計畫經濟化されたら生きて行くに最低の保証を得るための努力はさす必要はない。

遂行されて來た。總動員體勢強化確立の嚆には皇國最高使命者の認識する集團餘力がよき指導者の下に、躍進日本の明日を如何なる形に於て約束するか。今日の苦勞をきつと笑ひ話にする時が期得出來ると確信する。切符制OK一億人笑ふ

東京 岩崎 柳路

節米は泰米又は唐米に麥混合代用食三日目に一度乾うどん、そうめん(經濟的な美味な榮養的な代用食について)

大塚 今川 柳影

節米はよく噛むこと之が最も簡單であり最も賢明な方法だと思つて實行してゐる。或は齒科醫と云ふ僕の職業がこゝへ誘導したのかも知れないが、一よく噛むと云ふことは消化を助け胃腸を健全にするばかりでなく少量の食物によつて飽腹感、高血壓に避くべき多食の弊から免れることが出来る。即ち節米になる許りでなく個人の健康に於て最も大切なことである。

大阪 丸尾 潮花

節米と云われまします、私はどうしようかと心配します。私は幼い頃からずつと節米をして居ますので普通の方の半分も有れば足ります。よく腸をこわして絶食をしますが、一日位なら平氣で居られます。此れ以上の節米はねえ、なんぼせんざいが好きでも代用食には無理ですね。

大阪 黒川 紫香

私の行つてゐる代用食は別に目新しいものはありません。晝は主として工事現場に居りますので毎日工夫が色々考へて作つてくれます。今日は生うでんを湯でぬくめて醬油をつけて喰べました。





同舟近詠

松山 前田 五 健

贅澤ミ云へばこれだミ薬瓶
ほつかりミ月ほつかりミ出る河童
稲の花銃後の便り強くさせ
活殺はあなた任せの刀銀冶
手應への後ろ姿よ注告隊
働き手運根鈍をうなづかせ
煤の降る社宅夾竹桃がさき
句は成らず今年も子規忌川柳忌
拳固一つ新體制に子を叱り
雷が本當に落ちた隣り組
川柳が本職それも板につき

東京 阿部佐保蘭

我が子二階より落つ

小難をいましめあつて朝の膳

兵庫縣御影町 長崎 柳 秀

それ迄を云はせた人を軽く打ち
犬捕の街を見通す辻に立ち
無いものにする金がある二十才過
偽つて母の悦ぶ眼に怖れ
刑務所を出た見學は不氣味が
生えさこの所で違ふ毛がをかし
受繼いだ息子は別な店飾り

石川縣 松島みさり葉

手に持った物を捜して急きたて
不朽洞繁る柳も二百號

神戸 潮田 明 坊

人事課の一員にして綴る役
トントニ運ぶ話に喫ひ忘れ

大阪驛附近水禍(二句)

長靴の立ちふるまつてゐる出水

在鮮二十五年の僕ではあるが、幸か不幸か、未だに朝鮮料理を味ひ得ない。朝鮮料理は一般の嗜好に向く支那料理には到底及ぶべくもないが、喰ひ馴れてくると朝鮮特有の風味もあるだらうし、榮養素も多分に含ま



朝鮮料理

橋 本 言 也

れてゐるのだらうが、どうしてか僕には喰ふ氣になれない。幾度か朝鮮料理の料亭へ足を運んだ機会もあつたが、一度だつて勇氣を出して喰つてみる氣になれない。無論僕の偏食癖と神経質さが相當原因してゐるやうが、一面一般鮮人家庭の臺所風景を時折り目撃させられてゐるのでその先入觀念が相當手傳つてゐるやうだ。

ろ。殊に長鼓を叩いて朝鮮古来の哀愁を帯びた歌を唄ふ聲に異國情熱的なものを覺えらるゝことだらうと思ふ。だが、眼前卓上に置き並べられた料理にはいさゝか躊躇されるやうだ。何一つとして味覺を變るものがない。それでも喰ひ方を妓生に聞いて仕方なさそうに箸で突つかれてゐる様子を見ると氣の毒な氣さへする。僕としては朝鮮料理とはどんな物かを知つてもらへばそれで結構なのであるが、客としては折角のこちらの好意に對してもといふ心遣ひから、しぶ／＼箸を取つて申譯程口へ運ばれるのを見て無御迷惑だらうと

味で内地からの客を朝鮮料理へ案内する時もある。先づ妓生の清楚な姿や、美しい立派な魅力を感じ、流暢な内地語での流行歌、はては白頭山節、都々逸等々、その上手な節廻しに驚かれもし、感心もされることでせ

も思ふ。朝鮮料理にカルビーといふのがある。若い牝牛の肋のところが肉塊を一握り程骨ぐるみ味をつけて焼いたもので、あるが、綺麗に骨を喰ひ残すのを喰ひ上手にされてゐる。妓生が骨の一端を白い指で挟んで之をしゃぶりつく様は、およそその美しい歯並や紅い唇とは調和しない。寧ろ惨酷な觀さへする。

斯くいふと朝鮮料理とは如何にも低級且つ、審美的なものだとの概念を抱かれるかも知れないが、決して一概にそうでもなく内地人の間にも相當通人がある朝鮮の風俗習慣をよく理解し、勇氣(？)を出して進んで朝鮮料理の味覺を求むべくある程度の経験を積んでくると、朝鮮料理にも捨て難い風味のあることも解つてくるらしい。

る。母性の匂の濃い、好ましい句だ。私は路郎氏の蕨蔕草の句と共に夫婦句(こんな字句があるなら)として残して置きたいと思ふ。

など當時の新感覺から落ちついた句で路郎師の凡聖一如元旦の心知る山雨樓氏の皆すつと立つ葱畑に落ちなど忘れられぬ懐しがある。

感吟に就て

本誌創刊以来の名句推選とその感想に對する諸家の解答。願不同(編輯局)

★ 横濱 福田山雨樓

借りる氣で行けば有馬の夏と聞く
俺に似よ俺に似るなと子と思ひ

その日暮しも軒に雀がこぼるるよ
文學を經んじ馬で裾野ゆく
待つたなしの歩にさされたる
犬養毅

★ 秋風の中で乞食に拜まれる

★ 大阪 柴谷幸二郎
初蚊帳の中はシャツ着たキリギリス

子供達の幾續つた後のひととき、身も心も始めて自分のものになり得た母性の輕やかな氣持、ごろ寝の子のほゝあまじい姿態等情景躍如たるものがあ

★ 島根縣 尼 綠之助

私の頭に積み込んである古い手帳をポツ／＼めくつてみると思ひ出の句は限りない。名句であるかどうかは別として

十人に吸はせても赤い／＼唇いたづらな鉄なりけり蟹煮ら(前二)

★ 大阪 須崎 豆 秋

路郎師の夕櫻とんぼがへりがして見た

は、あやめ池でお作りになつたと聞いてゐますが、あやめ池畔に句碑として後世へ残していゝ名句だと信じます。

オムニコン

非特異性全免疫元

本剤は非特異免疫學說に準據して高度の免疫力を有する異種蛋白、リポイド及び脂肪を主体とせるものなり。

(適應症)

流感、各種肺炎、肺膿瘍、肺炎、傷寒、中耳炎、重傷、其他各科、急性、慢性、炎症性、傳染性、敗血症、並に化膿性膿瘍に對し廣汎に効用を奏す。

(用法)

注射無痛、副作用無、用法簡單、奏効迅速、價格低廉。

(包裝)

二五〇管入 二五〇管入 二五〇管入 二五〇管入 二五〇管入 二五〇管入 二五〇管入 二五〇管入 二五〇管入 二五〇管入

一星藥廠文一

總賣元 會社 黒田藥品商會 大阪・東京

大水の二階子供等食べてゐる
返り咲く主餌壺をかへてやり
夫人同伴返り咲く東京行
中學の理窟が父を怒らせる
矢大臣祇園は春の灯が這入り
精算をすれば割れない金目が出
屋台店荷馬車ひつきりなく通り
さつちでもよいこ子心にも遠慮
不自由はないが氣乗のある後妻
焦つても出来ぬ工面に一つ賣る
須磨の驛松がホームの屋根を抜け
與し易しと見てさつて先づ奢り
個性なき揉苦茶にして後に従き
破産は知らず振子は振つてゐる
曖昧な舉措を覺えて小役人

今治 長野 文庫

さしかけてやつた俠氣半分濡れ
洋装の形は良いが骨が見へ
馴染みだがおでん屋腰を据ゑさせず
ナイトクリームそんなものが賣れるのか
嚴主抗議その後は遂に蛇尾になる
分團長あきんごさ云ふ顔でなし

今治 長野 文庫

全快の祝二度して母は痩せ
パイプもうお役に立つた色でゐる
切符制一つ一つの有難さ

今治 勝谷山川 兒

勤めの娘なればうなぎの味も知り
母娘して蚊が蚊張にゐるさわぎなり
親のある借錢なれば面白し
ぬれねずみひきりむすこにて候
せなおよぎ磯のをんながきれいななり
センチファイライなき女給の面白し

今治 鳥生古弗

五月十二日盲腸にて入院
寝返りも出来ず不吉なこと思ふ
淋しさは一匙づゝの林檎汁

★ 張家口 岩崎 柳路
芦溝橋以來ひる寝のひまもなし
(句部郎師)

「先年路郎師と北支蒙疆、川柳行脚の時北京より事變の發端地芦溝橋へ行つた時頂いた短冊より」事變を織り込んだ輕い時局吟として現地を訪ねた私等には御名句として忘れることが出来ぬ。

★ 兵衛 柳秀
御影町 長崎 柳秀

川柳雑誌創刊號からの名句に就いての感想は「名吟は體験に生る」に盡きると思ひます。

★ 岡山 鈴木 九坡
こんな句が作れたらと思ふ。
墓屋根へ雪と降り／＼冬の星

足袋すこもきつく女は旅に出る
水客

一問一答

愚問には答へず一度答へた問には答へず一係

問——櫻原神宮奉獻句を募集してある吟社から勸誘をうけましたが、アレは募集することの許可をうけてゐるのですか。神宮へは何んの交渉もしてゐないのだと仄聞しましたが、ホントですか。奉獻句は事後承諾で差支ないのでしょうか。そしてこの問題の責任者は誰ですか。(敬神家)

答——神宮の許可は愚か、内交渉もしないで募集してゐるとうです。伊勢神宮とか櫻原神宮とかになれば奉獻するにしても物干へ出て女中さん空を見た

丹路

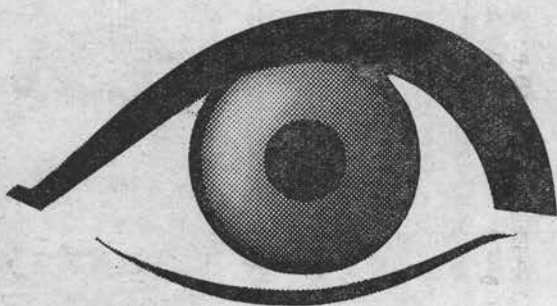
募集するに先立つて主唱した川柳懇話會の代表者や、主催吟社の代表者が参拜し、一應内諾を得てから募集するのが順序です。奉獻するんだから必ずうけて貰へると思ふのは輕率過ぎます。敬神の念のない證據です。しかも、無断で櫻原神宮奉獻と稱し句を募集した事は吟社の宣傳や柳誌の宣傳に利用したことになり、神宮への冒瀆行為です。別に惡爲でやつたことではないだらうから、罰しられはしないですが、無智の勝りではないでせう。寄附行為でも無届で募集すれば警察犯處罰令で罰せられます。櫻原神宮奉獻句などは勸題の詠進などに準じて、書式を一定し各自が敬虔な氣持で淨書して奉獻すべきでせう。

問——「川柳雑誌」の古い合本が欲しいのですが、有無をお聞かせ下さい。(合本狂)

答——全部揃つてゐません。必要な巻数を往復ハガキで營業部へ問合せ下さい。

問——古句質疑の欄を設けていただけませんか。(難苦生)

答——以前に姪子省二氏擔當で古句質疑の欄を設けましたが質疑者が少ないので廢しました。一考することになります。



シマズイタマズ

ロート目薬

眼の保健秋もロートを手放さず

點眼にいいいよ冴える蟲の聲

頑張りがロートで續く夜業の眼

適應症

結膜炎・角膜炎・疲勞眼
トラホーム・學校眼炎
眼瞼緣炎・結膜充血
角膜翳・麥粒腫…等

藥價

◆小瓶 二十錢 ◆大瓶 三十錢
◆徳用 五十錢 ◆小兒用 二十錢
▲全國到る處の藥店にあり

山田安民藥房 舖本

各地柳壇

本社八月例会 (大阪)

八月三日

於 御津八幡宮

出席者 (順不同)

出席者 (順不同)
路郎・草王・かほろ・紫香・鮎美・一龜
良祐・春珠・孤蓬・斗風・白柳子・蒼風
彌生・龍成・蜜多樓・風華・裏人・紅多
呂・征野・指洋・豆秋・久人・潮花・夜
王・滿潮・一笑・翠華・小松園・蓑乃・夜
リ

席題「ダルマ」

互

ダルマさん慰問袋をビヨコンと出
だるまから見れば人間よく轉び
飄逸な人なりだるまなぞ集め
夜逃げした後にダルマがはつと
床の間のダルマに住持よくにたり
一つ文け横を向いてゐるダルマ
うまいことダルマはこけたまゝ宵
縁のよいダルマの位置はかへられ
行水の盥へダルマさん落し
ダルマころがして十疊に孫と寝る
席題「だしぬけ」

豆秋 良祐 春珠 同 蜜多樓 紫香 鮎美 裏人 紅多呂 潮花 彌生 鮎美 裏人 紅多呂 鮎美 同 豆秋 斗風

規清稿投

用紙は原稿用紙又は投句箋の事
文字を正確明瞭に記載のこと
開催月日及場所記入のこと
締切は毎月廿五日とす
投稿先は本社宛

理整秋豆・郎路

だしぬけに十銭呉れた丈けおぼえ
だしぬけに拾圓呉れる儲け口
だしぬけにさいそくされて腹が
だしぬけの御歸館眼また眼顔
だしぬけに故郷の母の聲を聞き
(秀)だしぬいた友の脊中をみる
(軸)だしぬけに拾圓札をつかま
席題「蛙」

小松園 白柳子 久人 孤蓬 斗風 彌生 斗風 潮花 草王 紫香 潮花 春珠 孤蓬 豆秋 蒼風 斗風 蒼風 紫香

(軸)おんびきの脊中の色と土の色
席題「板 塀」
注文をもらふ板塀まわるなり
板塀を糸瓜の花が越えて来る
板塀の一つへだて一番ちがひ
板塀の春から夏へ繪がかはり
板塀に昔のまゝの節があり
板塀にもたれてバスを待つ眞晝
板塀がキャッチボールのバック
再婚の話 板塀に添ながら
板塀の隣も水らしい音
驛前の板塀惜しいものにされ
ラケットの音 板塀の午後三時
板塀のくぼんだところにお荷さん
板塀のところで悪友待ちうける
板塀の切れたところが交番所
竹馬で来て板塀の陽にもたれ
板塀を越せば二疊打と云ふ野球
(秀)板塀のあんな處に出入口
(軸)板塀へ一人ぼつちはもたれに
兼題「落下傘」
路郎
バラシュートも持た決意を肩に見
落下傘部隊もう撃つ構へなり
落下傘開くものと思へども
落下傘さして方角を見失ひ
バラシュート・パーマネット見上げられ
國境の風をはらんだ落下傘
つつがなく足のどいた落下傘
火を噴いた愛機を捨てた落下傘
さらばと落下傘部隊降り
落下傘雲の切れ目を降りてくる
蒼穹へはつきり開く落下傘
愛人の眼へバラシュート派手な降
落下傘敵の陣地が見えもせう
落下傘祖國を救ふ姿なり
バラシュート無事で花束をもち
落下傘ひらき群集はつとする
(人)落下傘もう敵國の空の上
(地)追ひ撃ちへ哀れ落ちる落下傘
(天)落下傘生きて歸へつて欲し人
川 廣島支部句會 (廣島)
八月八日 於 廣鐵俱樂部
大森風来子 報 紫浪

勸誘は乘氣になつたを見逃さず
あみだくじみんな乘氣のペンを
遺家族と開いて一肌脱ぐつもり
算盤をはちいて乘氣せぬ返事
安心をさせておくれと母乘氣
銭湯へ裸で行ける露次に住み
生ビールはだかの胸を染めて来る
上役を訪へば裸で迎へられ
郵便! へ真直ぐに行く裸の子
瘦せ身れシャツを脱げ帯を解け
七月二十四日
河合白外郎君應召を祝つて
出征へ和解の成つた手を握り
應召は言葉少く囁まされ
再會を靖國にして君は征く
君が征くところみんな地圖で追ひ
召され征く夢も大きく日の出する
召され征く子の肩幅がたのしい
出征へ別の氣持の母であり
聖戰三年俺も男として起たん
赤裸妻しつかりと結び終へ
征く朝のブラットの砂利踏みしめ
應召へ待ちかねてゐた日本刀
スタイルは去年の海水着を想ひ
シャツターを前に立つたり座つ
しやなりと股で行くハイヒール
スタイルブツク小脇に白い靴の先
まんざいと云ふスタイルでよく出
川 今治支部句會 (今治)
八月十一日 長野文庫報
殺生なお盆と云うに魚籠を提げ
迎へ火に靖國からも呼び戻し
切符制砂糖の足らぬ盆が来る
お盆には歸りますと子の手紙
盆が来て思ひ出れる地下の人
明石着て夏やせ一段目立つなり
軍帽を脱げは顔の色白し
銭湯で日焼けを仲仕かと思ひ
日焼した顔海も好き山も好き
川 下關支部句會 (下關)
七月廿二日 東方司半休報
政變を新聞三段抜きで出し 信義

菊正宗



店商納嘉本 會社 株式

金 屬 代 用 罐
食 品 用 紙 容 器
ア イ ス ク リ ー ム 用 紙 器
製 造 輸 出



二葉屋商店

大阪市住吉區晴明通一丁目四〇番地
電話 事務所用 天下茶屋四一〇〇番
工場專用 天下茶屋四九五四番
振替口座大阪九七〇四四番
郵便私書函大阪天下茶屋局一八番

髪 の 美 は
げ に 日 本 の
姿 な り



フケ・カユミを止め白髪・若禿
を防ぎ明朗な青年美を創る

ドーマホ椿豆伊

舗本油香椿豆伊

園 芳 彩 楓 大



め の た

妊娠としての大切な責任
はカルシウムを補給し
て諸病を防ぎ、子宮の收
縮を容易ならしめ「安産」
へ導くここにあります。



片瀬醫學博士述
「安産のために」冊子呈上

梶林醫學博士 推 奨
片瀬醫學博士 監 査

フダカルシウム錠

大阪道修町 和田卯助商店

SENRYU ZASSHI

Published montly by the Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

大正十三年三月三日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和十五年八月廿五日印刷
昭和十五年九月一日發行

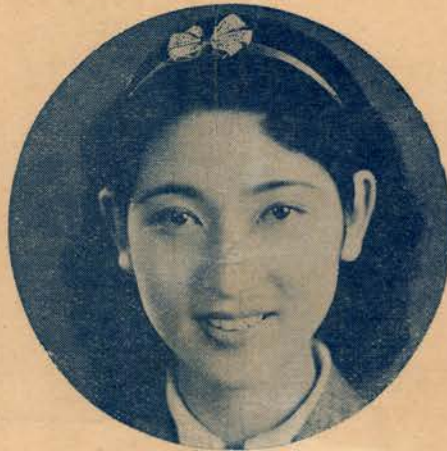
川柳雜誌

NO. 200

定價金30錢 送料壹錢

にきびと

美顏水



然ういふ時にも不思議なほどよく効きますので、殊に小さいお子方のある御家庭などには殊の外重寶がられてゐます。

▲ニキビ吹出物に非常によく効くので大評判の薬です。ニキビや吹出物でお困りの方に大きな喜びの糧／＼ととお勧めしたい薬です！

▲定價一版四十銭・六十銭・一圓廿五銭。全國藥店にあり

蚤・蚊・南京虫等の
毒虫でカユい時！

ニキビ

ニ	吹	ゼ
キ	出	ヒ
ビ	物	此
・	に	藥

5-53

化粧用 美顏水

ア	粧	の
ブ	下	お
ラ	に	化
顔	！	